

『河東記』 訳注稿 (一)

赤井益久 岡田充博 澤崎久和

はじめに

本誌の誌面を借りてここに訳注を試みる『河東記』は、晩唐の初め頃に成立した志怪の一書である。周知のように中国古典小説は、唐代において飛躍的な発展を遂げ、特に後半の中晩唐期には、後世名作と称される短編や著名な作品集を輩出した。当時の知識人層が小説という新しいジャンルに大きな関心と興味を寄せる風潮のなかで、この志怪小説集も誕生したと考えられる。

ただ、唐代の多くの小説集と同様、『河東記』成立に関する詳細は不明で、しかも早くに散逸して伝わらない。『太平広記』をもとに収集できる現存作品は三十四篇に過ぎず、中国文学

史あるいは小説史の記述においても、しばしば省略の憂き目に遭っている。そうした知名度の低い、謂わば埋もれかけた小説集ではあるが、現存の諸篇を通覧してみると、貴重な資料的価値や、高い文学的完成度を有する作品に行き当たって胸躍ることがある。例えば「板橋三娘子」の一篇は、実は古代インドの説話集『カタール・サリット・サーガラ』や、アラブの長編物語『アラビアン・ナイト』と繋がりを持つ翻案小説で、唐代における異域からの説話の伝播と変容を具体的に示してくれる。「蕭洞玄」の話も翻案小説で、李復言『統玄怪録』の「杜子春」（芥川龍之介の同名小説の原話として知られる）と共に、玄奘『大唐西域記』が中国に伝えたインドの民間伝承を原話としている。また化虎譚の「申屠澄」は、著名

な「李徴（人虎伝）」とは趣を異にした秀作と言えよう。今村与志雄『唐宋伝奇集』（岩波文庫、一九八八年）の言葉を借りれば、「本篇は、この種の作品のなかですぐれたもの」（下冊三〇二頁、注一三）として特筆に値する。

こうした魅力ある作品を収める『河東記』について、李劍國『唐五代志怪伝奇叙録』（南開大学出版社、一九九三年）は、次のように総評を加えている（下冊六四〇頁）。

載事全爲語怪之作、記述頗佳、事繁則文茂、事簡則言略、剪裁見匠思。短者止占三之一、貌雖彷彿於志怪舊體、但情味具足、乃絶佳小品、實以傳奇爲骨；而長者曲盡情態、用筆縝密、生動若覩。……

所載の内容は全て怪異を語る作品であるが、記述は大変優れていて、事柄が繁多であれば文章は盛美、事柄が単純であれば言葉は簡略で、推敲には工夫のあとがうかがわれる。短篇は三分の一を占めるに止まっており、それらは志怪の古いスタイルを彷彿させるものの、情味を備えた極めて優れた小品であって、実は伝奇を骨格としている。また長篇は心情を描いて委曲を尽くし、筆致は

緻密で、生き生きと真に迫って目に浮かぶようである。
……

一文はまた「惟行文稍見冗弱、不及玄怪之振然（ただ文章の綴り方にはやや冗長で繊弱なところが見られ、『玄怪録』の振然として盛んな文体には及ばない）」とも記しており、その瑕瑾を指摘することも忘れていない。しかし、総じて極めて高い評価であることに変わりはない。こうした高い文学的価値を持ちながら、なお十分な考究の及んでいないこの小説集について、訳注の作業を通じてさらに光を当ててみたいというのが、本稿起草の主たる動機である。

『河東記』とその著者に関しては、残念ながら極めて零細な資料しか残されていない。以下、李氏上掲書の詳審な考証に拠りながら、その概略を記しておくことにしたい。なお、岡田充博『唐代小説「板橋三娘子」考——西と東の変遷変馬譚のなかで』（知泉書館、二〇一二年）は、第二章第一節「所載小説集と撰者」において、やや詳しくこれを取り上げている（八三〜九八頁）。併せて参照いただければ幸いである。

『河東記』の書名は、両唐書の経籍・芸文志や北宋の書目類にも見えない。こうした点から、世間の大きな評判や反響とは縁のない、静かな成立とその後であったと想像される。

南宋期に至ると、著名な蔵書家晁公武の『郡齋讀書志』に、やつとその名が見える(1)。「郡齋讀書志」には袁本と衢本の二種が存在するが、初版本系統の袁本の卷三下・小説類には、次のようにある。

河東記 三卷

右不著撰人。亦記譎怪事。

この記事によれば、『河東記』はもと三卷、あやしげで奇怪な出来事を記すが、著者については不明ということになる。しかし、補正増訂版となる衢本の卷十三・小説類では、次のように改められている。

河東記 三卷

右唐薛漁思撰。亦記譎怪事。序云、續牛僧孺之書。

つまり著者は唐の薛漁思なる人物であり、その序文には「牛僧孺の書(志怪小説集『玄怪録』十卷を指す)を継ぐ」とあったという。

薛漁思については、南宋の洪邁『夷堅志』支癸序には「薛渙思之河東記」と記されており、これに従う説も見られる。しかし南宋・朱勝非『紺珠集』(文淵閣四庫全書本)卷七の『河東記』題下原注、元・馬端臨『文獻通考』卷二百十五・経籍考四十二は、いずれも「漁思」としており、「渙思」はやはり魯魚の誤りと見てよいのではないだろうか。

さて、この薛漁思(あるいは薛渙思)であるが、唐代の伝記資料類には見当たらず、経歴は皆目不明である。ただ書名から推測すると、河東が縁故の地あるいは撰述の地であったらしい。この地名と薛氏の結びつきで思い起こされるのは、六朝以来の名族であった河東の薛氏である。とすれば、唐初「河東三鳳」と称された薛収・薛元敬・薛德音らを生んだ、この誉れ高い一族に、薛漁思も末裔として連なる可能性が高い。(河東は広義には山西省の西部一帯をいうが、河東の薛氏であれば、一族の本貫である山西省永濟県の地を指す。)名門の血統を意識し、それを自らの著作のタイトルに示しながら、

ついに出世することなく終わった人物ということであろうか。

本書の成立に関しては、作品中の年号の記載が参考になる。

最も時代を降るものが「韋齊休」「段何」「崔紹」の大和（太和とも記す）八年（八三四）であるが、李劍国はこのうちの「韋齊休」に注目する。話の内容は、この年に亡くなった韋齊休なる人物が、死後も現れて家庭内の諸事に指示を下したというもので、その結びは次のようになっている。

其部曲子弟、動卽罪責、不堪其懼、及今未已、不知竟如之何。

その部曲・子弟は、動もすれば即ち罪責され、その懼に堪へざるも、今に及ぶも未だ已まず、竟に之を如何せんかを知らず。

つまり未だに収まることのない韋の叱責に、部下（2）や子弟はほとほと手を焼いているということであるが、この「及今未已」の「今」とは、常識的に考えれば、彼の死後からそれほど隔たっていない時期であろう。李氏はそれを二、三年後と考え、『河東記』の成書を開成一、二年（八三六、七）の

頃と見なしている（六四〇頁）。妥当な推論と言えよう。

こうして世に出た『河東記』は、南宋の末期までは伝わっていたようで、陸游の『老学庵筆記』（一一七四～一九四年の間に成立）巻十にその名が見えている。しかし、その後散逸したことは既に述べた通りである。清末の光緒十三年（一八八七）に至って、胡鼎による輯佚再編本が刊行されたが、原書については未見、程国賦『隋唐五代小説研究資料』（世紀出版集団・上海古籍出版社、二〇〇五年）に、その序文が収められている（一八〇頁）。

次に収録作品について総覧しておく、現存するのは以下の三十四篇（3）である。

- 01 「黒叟」巻四十一・神仙四十一
- 02 「蕭洞玄」巻四十四・神仙四十四
- 03 「慈恩塔院女仙」巻六十九・女仙十四
- 04 「葉靜能」巻七十二・道術二
- 05 「韋丹」巻百十八・報応十七・異類
- 06 「呂羣」巻百四十四・徳応十・人臣咎徴
- 07 「李敏求」巻百五十七・定数十二

- 08 「獨狐遐叔」卷二百八十一・夢六・夢遊上
- 09 「胡媚兒」卷二百八十六・幻術三
- 10 「板橋三娘子」卷二百八十六・幻術三
- 11 「盧佩」卷三百六・神十六
- 12 「党國清」卷三百七・神十七
- 13 「柳灑」卷三百八・神十八
- 14 「王錡」卷三百十・神二十
- 15 「馬朝」卷三百十・神二十
- 16 「韓弇」卷三百四十・鬼二十五
- 17 「韋浦」卷三百四十一・鬼二十六
- 18 「鄭馴」卷三百四十一・鬼二十六
- 19 「成叔弁」卷三百四十四・鬼二十九
- 20 「送書使者」卷三百四十六・鬼三十一
- 21 「臧夏」卷三百四十六・鬼三十一
- 22 「踏歌鬼」卷三百四十六・鬼三十一
- 23 「盧燕」卷三百四十六・鬼三十一
- 24 「韋齊休」卷三百四十八・鬼三十三
- 25 「段何」卷三百四十九・鬼三十四
- 26 「蘊都師」卷三百五十七・夜叉二

- 27 「許琛」卷三百八十四・再生十
- 28 「崔紹」卷三百八十五・再生十一
- 29 「辛察」卷三百八十五・再生十一
- 30 「龔播」卷四百一・宝二・金下
- 31 「申屠澄」卷四百二十九・虎四
- 32 「盧從事」卷四百三十六・畜獸三・馬
- 33 「李知微」卷四百四十・畜獸七・鼠
- 34 「李自良」卷四百五十三・狐七
- 一見して明らかのように、神仙や鬼神の話が半数以上を占めており、ほかに夢・応報・再生・道術・幻術・動物など、様々な話題も覗いている。一篇の長さはまちまちで、最も短い「踏歌鬼」が六十字、最長の「崔紹」はほぼ二千八百字と不揃いであるが、四百く八百字前後の作品が多くを占める。原本が何話を収めていたかは明らかでない。しかし、三巻という分量から推測して、それほど多いとは思われない。「崔紹」のような長い作品も含まれるところから考えて、三十四という数は、おそらく全体の三分の二(4)を優に越えていよう。とすれば、これら現存の作品によって『河東記』の全体像は、

かなりの程度まで示されていることになる。

最後に、使用したテキスト、訳注の基本的な方針について述べておきたい。

底本には、一九六一年中華書局排印の新一版『太平広記』を選んだ。このテキストは、一九五九年に人民文学出版社より刊行された北京第一版をもとに、排印上の誤りを正して重印したもので、現在最も普及し利用されている版本であろう。なお、訳者の手元には一九六一年新一版の原本が備わっていないため、一九八一年の第二次印刷本を用いている。

底本以外には左記の五書を参照し(5)、校記には下記の略称を用いた。閲覧が比較的容易な基本的版本の幾つかを選んだままで、周到な校勘には程遠く、異体字についても特記する必要がある場合を除いては触れていない。しかし字句の異なるの大凡を確認するには、これで十分間に合うと考えている。

内閣文庫蔵紅葉山文庫明許自昌校本

許本

一九六九年新興書局影印清黄晟校本

黄本

一九八三〇八六年上海古籍出版社影印文淵閣四庫全書本

四庫本

一九八三〇四年江蘇広陵古籍刻印社影印筆記小説大観本

筆記本

二〇一一年北京燕山出版社刊張国風『太平広記会校』

会校本

訳注に当たっては、最初に原文の全文を掲げた後、【訓読】

【訳】【校記】【注】【参考】の順に示してゆく。一話が長いものについては、適宜分段し、それぞれに原文・訓読・訳・校記・注を付ける。【注】については、語義に限らず用語や表現にも注目し、特に『太平広記』あるいは『河東記』に同一ないしは類似した用語・表現が見られる場合は、煩を厭わず指摘することとした。【参考】には、類話や関連資料・参考文献などを、可能な限り広く挙げる。

『太平広記』の翻訳あるいは訳注には次のようなものがあり、先行研究として必要に応じて参照した。

〔単行書〕

王汝濤 等選訳『太平広記選』

全三冊(齊魯書社、一九八〇〇八二年)

全二冊（齊魯書社、一九八七年改訂版）

陸昕 等訳『白話太平広記』

（北京燕山出版社、一九九三年）

周振甫主編『白話太平広記』

全二冊（中州古籍出版社、一九九三年）

高光 等訳『文白対照全訳《太平広記》』

全五冊（天津古籍出版社、一九九四年）

丁玉琿 等訳『白話太平広記』

全五冊（河北教育出版社、一九九五年）

*他に唐文 韓璋訳『桜桃倩女 《太平広記》選訳』（黒竜

江人民出版社、一九八七年）がある。また漢英対訳本の『太

平広記選』全二冊（大中華文庫・北京外文出版社、二〇

〇七年）があるが、未見。

木村秀美監修 堤保仁編

『訳注太平広記 鬼部（一）～（四）』（やまと崑崙企画、

一九九八、二〇〇一、二〇〇四、二〇一〇年）

西本芳男新釈・編集『新釈太平広記 鬼部（一）～（四）』

（自家版、二〇〇三～二〇〇五、二〇〇八年）

塩卓悟 川村晃太郎編『訳注太平広記 婦人部』

（汲古書院、二〇〇四年）

〔論文〕

太平広記研究会『太平広記』訳注（一）～（六）

（広島中国学会『中国学研究論集』一〇～一五、

二〇〇二～二〇〇五年）

*訳注の対象は、夜叉・悟前生・驍勇部

太平広記研究会『太平広記』訳注（七）～（二十二）

（広島中国学会『中国学研究論集』一六～三一、

二〇〇六～二〇一三年）

*訳注の対象は、巫・厭呪・幻術・妖妄・神部

今場正美 尾崎裕『太平広記』夢部訳注（一）～（十）

（中国芸文研究会『学林』四三～五六、

二〇〇六～二〇一三年）（6）

太平広記読書会『太平広記』訳注…巻四百十八～二十一

・龍』（熊本大学文学部国語国文学会『国語国文学研究』

四三～四九、二〇〇八～二〇一四年）

上原究一 鈴木弥生 武井遥香 鈴木政光『太平広記』

を読む — 虎に食べられそうになる話 —

(東京大学文学部中国語中国文学研究室『東京大学中国語中国文学研究室紀要』一一二、二〇〇九年)

* 訳注の対象は、「稽胡」(巻四百二十七)・「柳井」(巻四百三十三)・「峡口道士」(巻四百二十六)

高西成介『『太平広記』訳注(稿)』巻四百・宝部・金上

(『高知県立大学紀要』六一、二〇一二年)

今回は、上掲一覧表冒頭の「黒叟」を取り上げたが、以後は必ずしも『太平広記』の順序には従わない。おそらくは出来上がった訳稿から、順不同で発表してゆくことになろう。

完訳を目指して輪読を始め、改めて気付かされるのは、古典小説研究に必要な知識の、時代と分野を越えた淵博さである。

個人の能力の限界を感じ、三人の共同作業に頼ってみても、「文殊の知恵」とは中々ゆかない。不備の多さを危惧しつつ、識者の御教示・御批正を切に願う次第である。

1 『河東記』の名は、北宋の樂史『太平寰宇記』にも見える(巻四

十二・河東道三・忻州、巻四十九・河東道十・代州)が、引用文から判断して同名の地理書と考えられる。南宋の鄭樵『通志』巻六十六・藝文略第四・地理・郡邑に「河東記三卷」とあるのは、この地理書と薛漁思『河東記』を混同したものであろうか。

2 岡田『唐代小説「板橋三娘子」考』では、「下僕」とした(八六頁)が、「部下」に改める。

3 明・陶宗儀『說郛』巻六十上には、『河東記』からとして「崔元暉」「銅鐘書」「劉勳女」「葉淨能」「馬舉」の五作品を節録する。

しかし、「崔元暉」は「崔紹」、「葉淨能」は「葉靜能」の話。また「銅鐘書」は『太平御覽』巻五百七十五に引かれる『晋中興書』、「劉勳女」は『華佗別伝』、「馬舉」は『瀟湘録』からの誤引で、三十四篇以外の話は無い。

4 岡田『板橋三娘子』考』では「二分の一」とした(八七頁)が、「三分の二」に改める。

5 ほかに一九七二年に中文出版社より刊行の影印本があり、清孫潛手校談愷本と称する。しかし、富永一登『『太平広記』の諸本について』(『広島大学文学部紀要』五九、一九九九年)によれば、一九三四年に文友堂書坊から出版された、談本影印本の影印である。

孫本でない上、「藏書印を消し、字句を書き加えたり、許刻本・黄氏巾箱本を貼付したりした改竄本」(注23)とのことで、問題が多い。特に必要な場合を除いては、校記に示さないことにした。

6 なお今場・尾崎訳には、この論考から訓読と簡単な語注のみを取り出し、「副読本としての体裁」(著者「前書き」)をとって一冊にした左記の書がある。

今場正美 尾崎裕『『太平広記』夢部訳注稿』

卷二百七十六〜二百八十二、中国藝文研究会、二〇〇五年

(岡田充博)

第一話 黒叟 (卷四十一・神仙四十一)

【全文】

唐寶應中。越州觀察使皇甫政妻陸氏。有姿容而無子息。州有寺名寶林。中有魔母神堂。越中士女求男女者。必報驗焉。政暇日。率妻孥入寺。至魔母堂。捻香祝曰。祈一男。請以俸錢百萬貫締構堂宇。陸氏又曰。遂所願。亦以脂粉錢百萬。別繪神仙。既而寺中遊。薄暮方還。兩月餘。妻孕。果生男。政大喜。構堂三間。窮極華麗。陸氏於寺門外築錢百萬。募畫工。自汴、滑、徐、泗、揚、潤、潭、洪。及天下畫者。日有至焉。但以其償過多。皆不敢措手。忽一人不說姓名。稱劍南來。且言善畫。泊寺中月餘。一日視其堂壁。數點頭。主事僧曰。何不速成其事耶。其人笑曰。請備燈油。將夜緝其事。僧從其言。至平明。燦爛光明。儼然一壁。畫人已不見矣。政大設齋。富商來集。政又擇日。率軍吏州民。大陳伎樂。至午時。有一人形容醜黑。身長八尺。荷笠莎衣。荷鋤而至。闍者拒之。政令召入。直上魔母堂。舉手鋤以斫其面。壁乃頽。百萬之衆。鼎沸驚鬧。左右武士欲擒殺之。叟無怖色。政問之曰。爾顛癩耶。

叟曰。無。爾善畫耶。叟曰。無。曰。緣何事而斷此也。叟曰。

恨畫工之罔上也。夫人與上官捨二百萬。圖寫神仙。今比生人。

尚不逮矣。政怒而叱之。叟撫掌笑曰。如其不信。田舍老妻。

足爲驗耳。政問曰。爾妻何在。叟曰。住處過湖南三二里。政

令十人隨叟召之。叟自葦菴間。引一女子。年十五六。薄傅粉

黛。服不甚奢。艷態媚人。光華動衆。頃刻之間。到寶林寺。

百萬之衆。引頸駭觀。皆言所畫神母。果不及耳。引至階前。

陸氏爲之失色。政曰。爾一賤夫。乃蓄此婦。當進於天子。叟

曰。待歸與田舍親訣別也。政遣卒五十。侍女十人。同詣其家。

至江欲渡。叟獨在小遊艇中。衛卒侍女叟妻同一大船。將過江。

不覺叟妻於急流之處。忽然飛入遊艇中。人皆惶怖。疾棹趨之。

夫妻已出。攜手而行。又追之。二人俱化爲白鶴。冲天而去。

出會昌解頤及河東記

【原文】1

唐寶應中、越州觀察使皇甫政妻陸氏、有姿容而無子息。州

有寺名寶林、中有魔母神堂、越中士女求男女者、必報驗焉。

政暇日、率妻孥入寺、至魔母堂、捻香祝曰、祈一男。請以俸

錢百萬貫締構堂宇。陸氏又曰、儻遂所願、亦以脂粉錢百萬、

別繪神仙。既而寺中遊、薄暮方還。

【訓読】1

唐の宝応中、越州觀察使の皇甫政の妻陸氏は、姿容有りて

子息無し。州に寺の宝林と名づくる有りて、中に魔母の神堂

有り、越中の士女の男女を求むる者、必ず報驗あり。政は暇

日に、妻孥を率ゐて寺に入り、魔母の堂に至り、捻香して祝

りて曰く、「二男を祈る。請ふ俸錢百萬貫を以て堂宇を締構せ

んことを」と。陸氏 又た曰く、「儻し願ふ所を遂ぐれば、亦

た脂粉の錢百萬を以てし、別に神仙をゑがかん」と。既にして

寺中に遊び、薄暮に方めて還る。

【訳】1

唐の宝応中、越州觀察使の皇甫政の妻陸氏は、容姿麗しか

つたが、男児に恵まれなかつた。この州に宝林寺という名の

寺があり、そこに魔母を祀る神堂があつた。越中の士女のこ

こに来て男児女児を求める者には、必ずあらたかな靈驗があ

つた。政は暇な日に妻子を連れて寺にでかけ、魔母の堂に入

つて香を焚いて祈つて言つた、「男児を一人お授け下さい。俸

祿の金百万貫で御堂を建立いたしますゆゑ」。陸氏はさらに言

つた、「もしも願いをかなえていただけましたら、わたくしも

脂粉錢百万貫によって、別に神仙の絵を御堂に描くことになしたましよう」と。そして寺院の中を散策すると、暮れ方になってやっと帰還したのであった。

【校記】 1

字句の異同なし。

【注】 1

○黒叟 この話に登場する色黒の醜い老人（実は仙人）。『太平広記』巻三十五・神仙三十五・「韋丹」にも、黒老と呼ばれる黒く痩せた日雇いの老農夫が登場し、彼もまた仙人である（出典は唐・闕名『会昌解頤録』。他に巻七十二・道術二・「騾鞭客」の鉄屑を銀に変える不思議な人物も、「相貌麤黒」とされる（出典は唐・盧肇『逸史』。異貌、醜貌、あるいは襤褸をまとう外貌は、しばしば神仙の世を忍ぶ姿として描かれるが、これもその一典型であろう。こうした醜陋な仙人の説話に関する論考としては、川上義三「醜陋仙翁説話の伝奇小説への展開——続玄怪録の「張老」の成立について——」（福井漢学会『漢文学』一三、一九六九年）があり、「黒叟」も取り上げられている。

○寶應 唐の代宗の年号。西暦七六二～七六三年。

○越州 浙江省紹興一帯の地。

○觀察使 官名、觀察処置使。唐の制度で、州県を巡視して地方の役人を監督することを任務とした。もとは按察使、後に採訪処置使と称したが、乾元元年（七五八年）に觀察処置使と改められた。

○皇甫政 河南の人で、徳宗の貞元（七八五～八〇五）初、浙東觀察使としてこの地に赴任し、治水事業を行って功績があった。『旧唐書』巻十一、百三十、百五十五、『新唐書』巻四十一、百五十一に短い記事が見え、『新唐書』巻四十一・地理志五の越州会稽郡山陰県の条には、「貞元元年、觀察使皇甫政鑿山以畜洩水利、又東北二十里作朱儲斗門（貞元元年、監察使皇甫政は山を鑿ちて以て水利を畜洩し、又た東北二十里に朱儲の斗門を作る）」とある。ほかに舅の崔祐甫に「廣喪朋友議」（『文苑英華』巻七百六十七、『唐文粹』巻四十二）、『全唐文』巻四百九）があつて、彼の優れた人となりを記している。また柳宗元の「先君石表陰先友記」（『柳河東集』巻十二、『全唐文』巻五百八十八）、宋の孔延之『会稽掇英集』巻十八、十九などにも行跡を載せる。

ところで、唐の段安節『楽府雜録』全一卷の「笛」には、

笛の名人李謨にまつわる不思議な逸話が見え、そこに皇甫政が登場する。その話というのは、次のようなものである。

唐の開元（七一三〜七四一）のころ李謨という笛の名手が出て、安祿山の乱の後、江東を転々としていた。越州刺史の皇甫政は、月夜に鏡湖に船を浮かべ、李謨に笛を吹かせていた。すると小舟に乗った一人の老人が現れて、その音に耳を傾けた。老人の風貌を異とした政が声をかけると、彼も笛を能くするという。そこで謨の笛を貸し与えて吹かせたところ、鏡湖が波立ち、数暈吹いたところで真つ二つに裂けてしまった。すると、老人は懐中から一本の笛を取り出して曲を吹き終えた。政が見ると、二匹の龍が小舟を守って聴き入っている。老人はその笛を謨にくれたが、吹いても鳴らすことができなかつた。謨は拝謝して演奏法を求めたが、間もなく老人は小舟に入ってしまい、何処とも行方が分からなくなつてしまった。

音楽にまつわるこの神仙的な奇譚にも、本話と似たところがあつて興味深い。なお、李謨の話は『太平広記』巻二百四・楽二・笛にも、『国史補』および『逸史』から二話が引かれている（【参考】参照）。ただ、これらの話には、皇甫政は登

場しない。

○姿容 すがたかたち。容姿。『河東記』では、他に「蕭洞玄」（巻四十四・神仙四十四）、「盧佩」（巻三百六・神十六）、「蘊都師」（巻三百五十七・夜叉二）にも見える。

○寶林 越の会稽にあつた寺の名。李芳民『唐五代仏寺輯考』（商務印書館、二〇〇六年）は、江南道・越州の項にこの寺を挙げ、唐の徐浩「寶林寺作」（『全唐詩』巻二百十五）、方干「題寶林寺禪者壁」（『全唐詩』巻六百五十三）、宋の贊寧「宋高僧伝」巻七の「唐越州應天山寺希圓傳」を資料として引いている（一八七頁）。ただ、より早い資料としては、梁の慧皎『高僧伝』巻八の積慧基の伝に、「乃於會邑龜山立寶林精舍、手疊磚石、躬自指磨（乃ち会邑の龜山に宝林精舍を立て、手づから磚石を疊ね、躬自ら指磨す）」とあり、この僧が会稽の龜山に宝林寺を建立したことが分かる。また寺の由来沿革については、宋の孔延之『会稽掇英総集』巻八「應天寺」の記事が参考にならう。同書によれば、山陰県の東の龜山にあるこの寺は、もとは「寶林寺」の名であつたが、乾符（八七四〜八七九）年間に「應天」と改められたという。宋の施宿『会稽志』巻十五・高僧も、南朝宋の元徽（四七三〜四七七）初

に山陰法華寺の釈慧基が建立し、普賢菩薩の懺法（懺悔のための行法、儀式）を始めたと述べる。

本話にかかわる記事は、残念ながらそのいずれにも見られないが、『会稽掇英総集』巻八に引く律詩の中に、五代呉越の忠遜王錢俛（宏俛）の作「再遊應天寺聖母閣」がある。題辭にいう「聖母閣」とは、「魔母神堂」のことであろう。ただし、詩中に「聖母」「魔母」についての言及はない。

○魔母 「魔母」に関しては、唐の孟棻『本事詩』嘲戲第七に、裴談が強悍で嫉妬深い妻を恐れて「九子魔母」に喩えたという、初唐期の逸話が見える。『漢語大詞典』は、これを「仏經中の鬼子母」と説明している（第一冊七二八頁）。また同詞典の同頁には「九子母」の項も見え、こちらは「女神名。伝説能佑人生子」として、『漢書』注や『荆楚歲時記』を引く（この典拠については【参考】参照）。『大漢和辞典』は、「九子母」「九子魔母」を共に鬼子母神としており（第一巻三六九頁）、『漢語大詞典』の説明とは幾分食い違う。仏教の鬼子母神は、千あるいは万の子を産んだといわれるが、「九子」の「九」が多数であることを象徴しているとすれば、多産の神として重なるう。ただ「亦以脂粉錢百萬、別繪神仙」の一節から考え

ると、仏寺に安置されてはいても、道教的な性格も併せ持つ神だったようである。

両辞典の説明以外に、この女神について論及するものとしては、范崇高『中古小説校釈集稿』（巴蜀書社、二〇〇六年）、王汝濤主編『太平広記選（修訂本）』（齊魯書社、一九八七年）などがある。その内容については【参考】を参照。

○神堂 神を祀る殿堂。『太平広記』では、ほかに卷三百六十・妖怪二・「元自虚」（出典は『会昌解頤録』）に一例。

○男女 息子と娘。『河東記』では、「板橋三娘子」（卷二百八十六・幻術三）にも一例。

○報驗 応報の明らかなるし。『太平広記』ではこの一例のみであるが、古くは『顔氏家訓』卷下・帰心篇第十六に用例が見える。

○妻孥 妻と子供。『太平広記選』は、「孥」の本義は子であるが、「妻」字と連用されて単に妻を指す意味で用いられているという。上文の「無子息」との対応を考えての説であろうが、「妻や子」の意味で使われるのが一般的である。『河東記』の「韋齊休」（卷三百四十八・鬼三十三）に見える「幽冥間更憂妻孥……（幽冥の間に更に妻孥を憂ふ……）」の用例も、妻には

限定されていない。ここはやはり通常の意味にとり、娘はいたが息子に恵まれなかったと見るべきであろう。北京燕山出版社および中州古籍出版社の『白話太平広記』、天津古籍出版社『文白对照全訳《太平広記》』は、いずれも「妻孥」を「妻子」と訳している。「妻子」は「妻」「妻と子」のいずれの意味にも用いられるため、不明瞭なところが残る。河北教育出版社『白話太平広記』は、「妻孥」を「妻子及家人」として「孥」を下僕の意味にとり、「無子息」については「没有生兒育女」としているが、従い難い。

○捻香 香をつまんで焚く。『法苑珠林』巻十八、八十二、『雲笈七籤』巻四十一、四十三、四十五、八十、九十六などに用例が見える。『太平広記』では、ほかに巻百十一・報応十・観音経・『釋道固』に一例（出典は唐・釈道世『法苑珠林』）。

○俸錢 役人に与えられる報酬。古くは『史記』巻五十三・蕭相国世家に見える語。『太平広記』にも十例ほど。ここは、俸禄の金を神への謝礼とすることをいう。

○貫 銅錢一千文をいう単位。貫は錢を通す縄で、千文を一括りとした。

○締構 建物などを組み立てる。建造する。「締」は「結」と

同意。『太平広記』では、ほかに巻百人・報応七・金剛経・「蔡州行者」（出典は唐・盧求『報応記（金剛経報応記）』）、巻百九十三・豪侠一・「虬髯客」（出典は唐・裴鉶『虬髯伝（虬髯客伝）』）、巻四百六十三・禽鳥四・「仙居異鳥」（出典は前蜀・杜光庭『録異記』）に用例が見える。

○堂宇 大きな建物の屋根。転じて表御殿をいう。

○脂粉錢 觀察使の妻に上納される金。『太平広記』巻四百九十七・雜録五に「脂粉錢」の一条があり、『嘉話録』（唐・韋絢『劉賓客嘉話録』）から記事を引く。それによれば、湖南觀察使や柳州刺史にこうした慣習があり、一軍の將が刺史の妻のためにこれを徴収したという。

【原文】 2

兩月餘、妻孕、果生男。政大喜、構堂三間、窮極華麗。陸氏於寺門外築①錢百萬、募畫工、自沐、滑、徐、泗、楊②、潤、潭、洪、及天下畫者、日有至焉。但以其價過多、皆不敢措手。忽一人不說姓名、稱劔南來、且言善畫、泊寺中月餘。一日視其堂壁、數點頭。主事僧曰、何不速成其事耶。其人笑曰、請備燈油。將夜緝其事。僧從其言。至平明、燦爛光明、

儼然一壁、畫人已不見矣。

【訓読】 2

両月余りにして、妻孕み、果たして男を生む。政大いに喜
び、堂の三間なるを構へ、華麗を究極す。陸氏は寺門の外に
於いて銭百万を築き、画工を募るに、汴、滑、徐、泗、揚、
潤、潭、洪より、天下の画者に及び、日に至る有り。但だ其
の償の過だ多きを以て、皆敢へて手を措かず。忽ち一人の姓
名を説かず、劍南より来ると称し、且つ画を善くするを言ひ、
寺中に泊すること月余なり。一日 其の堂壁を視て、數しば
点頭す。主事の僧曰く、「何ぞ速やかに其の事を成さざるや」
と。其の人笑ひて曰く、「請ふ灯油を備へんことを、將に夜に
其の事を緝めんとす」と。僧 其の言に従ふ。平明に至り、
燦爛たる光明、一壁に儼然たりて、画人は已に見えず。

【訳】 2

二ヶ月余りたつて、政の妻は懐妊し、果たして男児を生ん
だ。政は大喜びし、贅を尽くして広き三間の神殿を建てた。
陸氏は寺の門外に百万銭を積み上げ、画工を募った。すると
汴、滑、徐、泗、揚、潤、潭、洪の諸州をはじめ、天下各地
の画工たちが、日々押し寄せた。ただ、その代価が余りに多

すぎるので、誰も敢えて手をつける者がなかった。が、突然
一人の、名前も明かさず劍南から来たと称する人物が、絵に
長じていると言い、一月余り寺に逗留した。そしてある日、
その堂の壁を見て、しばしば頷いた。主事の僧が「どうして
早く描き上げないのかね」と尋ねると、彼は笑つて言った、「灯
火の油を準備して下さいませんか。夜になったら仕上げるこ
とに致しましょう」と。そこで僧は、その言葉に従った。夜
明けになると、燦然とした光が壁一面に蔽かに輝き、画工の
姿はもう見えなかった。

【校記】 2

①「築」、会校本は「塚」に作り、校記に「原作『築』。現據
孫本改」とある。

②「揚」、許本・四庫本は「揚」に作る。「揚」が正しい。

【注】 2

○三間 「間」については、田中淡「中国の伝統的木造建築」
『建築雑誌』98・No.1214、一九八三年）および「唐代都
市の住居の規模と算定基準」『岩波講座世界歴史9 中華の
分裂と再生 3〜13世紀』月報16、一九九九年）に論及があ
る。それによれば、「間」とは建物正面の柱間の数（例えば柱

六本なら五間)を言い、一間＝六尺といった絶対寸法ではなく、建築構造の規模の表記である。

○究極 極めつくす。『河東記』では、「李敏求」（巻百五十七・定数十二）に「壯麗究極」、「崔紹」（巻三百八十五・再生十一）に「究極奢麗」の用例が見える。

○汴、滑、徐、泗、揚、潤、潭、洪 州の名。汴州は水陸交通の要路にあたり、後に宋の都が置かれた開封で、『新唐書』巻三十八・地理志二の記載によれば、州としての等級は最上位の輔につぐ雄。滑州は雄につぐ望の等級で、ともに現在の河南省の地。徐・揚・潤は江蘇省の地。揚州には大都督府が置かれ、徐州は緊、潤州は雄につぐ望の等級。泗州は安徽省の地で、等級は望につぐ上、潭州は湖南省、洪は江西省の地で、ともに都督府が置かれた。いずれもその地方の中心地である。

○措手 手をつける。『太平広記』では、他に巻百九十二・驍勇・「王宰」（出典は後周・王仁裕『玉堂閑話』、巻二百五十七・嘲諷・封舜卿（出典は王仁裕『王氏見聞（王氏見聞集）』）に用例が見える。

○劔南 劔南道。四川省の大部分を占める。

○點頭 うなづく。

○主事 事をつかさどる。主となつて事務を行う。中村元『仏教語大辞典』（東京書籍、一九七五年）によれば、禪宗では監寺（住持に代わつて寺内の事務を監督）・維那いなの（雑事、修行僧の指導）・典座てんざ（衣食住を司る、のち食事係）・直歳しつさい（客僧接待）の四職をいう（上巻六二二頁）。「主事僧」の語は、『太平広記』では他に巻百三十四・報応三十三・宿業畜生・「上公」（出典は後周・王仁裕『玉堂閑話』、巻百七十二・精察二・「李德裕」（出典は唐・嚴子休『桂苑叢談』）に見える。『太平広記選』は、「主事（負責） 這件事的和尚」と解説する。

○緝 おさめる。修理する。整える。『旧唐書』巻百十八・楊炎伝に、辺地の築城計画に対する段秀実の諫言として、「又春事方作、請待農陳而緝其事（又た春事方に作れば、請ふ農を待ちて陳し、其の事を緝めんことを）」の語が見える。

○平明 夜明け。

○燦爛 目に鮮やかなさま。きらびやか。『太平広記』では、他に巻百七十四・俊弁二・「裴琰之」に「詞理縱横、文華燦爛（詞理は縦横にして、文華は燦爛たり）」（出典は唐・韓琬あるいは韋述『御史台記』）の一例。

○儼然 おごそかなさま。『太平広記』においても、卷三十二・神仙三十二・「顔真卿」の「棺朽敗而尸形儼然（棺は朽敗せるも而るに尸形は儼然たり）」（出典は前蜀・杜光庭『仙伝拾遺』ほか）をはじめとして、しばしば用例が見える。

○一壁 「一」は、総て、皆の意味を持つ。ある壁一面に。

【原文】 3

政大設齋、富商來集。政又擇日、率軍吏州民、大陳伎樂。至午時、有一人形容醜黑、身長八尺。荷笠莎衣、荷鋤而至。闔者拒之、政令召入、直上魔母堂、舉手鋤以斫其面、壁乃頽。百萬之衆、鼎沸驚鬧。左右武士、欲擒殺之、叟無怖色。政問之曰、爾顛癩耶。叟曰、無。爾善畫耶。叟曰、無。曰、縁何事而斫此也。叟曰、恨畫工之罔上也。夫人與上官捨二百萬、圖寫神仙。今比生人、尚不逮矣。政怒而叱之。叟撫掌笑曰、如其不信、田舍老妻、足爲驗耳。政問曰、爾妻何在。叟曰、住處過湖南三二里。政令十人隨叟召之。

【訓読】 3

政は大いに齋を設け、富商來集す。政 又た日を択び、軍吏・州民を率ゐて、大いに伎樂を陳ぬ。午時に至り、一人の

形容醜黒にして、身長八尺なる有り。荷笠莎衣にして、鋤を荷ひて至る。闔者 之を拒むも、政召し入れしむるに、直ちに魔母の堂に上り、手にせる鋤を挙げて以て其の面を斫れば、壁は乃ち頽る。百万の衆、鼎沸驚鬧す。左右の武士、之を擒へ殺さんと欲するも、叟は怖るる色無し。政 之に問うて曰く、「爾 顛癩なるか」と。叟曰く「無」。「爾 画を善くするか」と。叟曰く「無」。曰く、「何事に縁りて此を斫るや」と。叟曰く、「画工の上を罔くを恨むなり。夫人、上官と与に二百萬を捨し、神仙を図き写すも、今、生人に比ぶれば、尚ほ逮ばず」と。政怒りて之を叱するも、叟は掌を撫つて笑ひて曰く、「如し其れ信ぜずんば、田舍老の妻、驗と為すに足るのみ」と。政問ひて曰く、「爾が妻は何くに在りや」と。叟曰く、「住処は湖南を過ぐるること三二里なり」と。政十人をして叟に随ひて之を召さしむ。

【訳】 3

そこで政は盛大に齋食を用意し、富商たちが集まった。また吉日を選んで、軍の役人達や民衆を従えて盛大に歌舞を催した。昼時になり、容貌醜く色黒で、身の丈八尺もある人物が現れた。その男はハスの葉の笠にハマスゲの簔をまとい、

鋤を担いでやって来た。門番が押しとどめたが、政が呼び入

れさせると、ずかずかと魔母の堂に上った。そして手の鋤を振りあげて魔母の顔に斬りつけると、壁は頹れ落ちてしまった。居合わせた百万の観衆は、鼎の湯が沸き返ったように驚き騒ぎ、左右の兵士はこれを捕らえて殺そうとしたが、老人は懼れる気配もなかった。政が「お前は、気でも狂ったのか」と聞くと、老人は「いいえ」と答える。「絵が上手いのか」と聞くと、「いいえ」と言う。「ではどういうわけで、この絵を斬ったのか」と尋ねると、「画工がお上を欺いているのが我慢ならなかったのでございます。奥方様は、あなた様と御二人で、二百万の金を喜捨して神仙の像を描かせなされたものの、それは生身の人間にも及ばぬ出来映えでございます」と。政は怒って老人を叱りつけたが、彼は手を打って笑い、「もし信じないと仰るならば、この田舎親父の妻を証拠と致せば足りましょう」と言った。政が「お前の妻は何処にいるのか」と尋ねると、老人は「住まいはこの湖の南を過ぎて二、三里ほどのところでございます」と言う。そこで政は十人の者に命じて老人に随わせ、その妻をやってこさせた。

【校記】3

字句の異同なし。

【注】3

○設齋 「齋」は、神仏に供える食事、僧侶の食事が本来の意味。「設齋」は『太平広記』にも常見の言葉。ここは、客をもてなすための精進料理を用意する。

○擇日 日を選らぶ。吉日を選ぶ。古くは『礼記』曾之問篇に見える言葉。

○軍吏 もとは軍隊の各階級における長を総称し、文官も含んだ。ただ『太平広記』に登場する「軍吏」は、罪人の捕り方として出動したり、副業を営んだりしており、高い身分とは思われない。例えば巻八十六・異人六・「盧嬰」には、「是日軍吏圍宅擒伯和棄市（是の日 軍吏は宅を囲みて伯和を擒へて棄市す）」（出典は唐・李伉『独異志』、卷三百五十四・鬼三十九・「徐彦成」には「軍吏徐彦成恒業市木（軍吏徐彦成木を市あきなふを恒業とす）」（出典は南唐・徐鉉『稽神録』、卷四百七十一・水族八・水族為人・「宋氏」には「江西軍吏宋氏嘗市木至星子（江西の軍吏宋氏 嘗て木を市ひて星子に至る）」（出典は『稽神録』とある。（もつとも卷三百九十四・雷二・「裴用」のように、「家富於財」と記される富裕な軍吏

もいたようである。出典は唐・薛用弱『集異記』。また、卷四百五・宝六・奇物の「嘉陵江巨木」には、「因廣召舟子泊軍吏羣民（因りて広く舟子を召して軍吏・群民に泊ぶ）」とあり（出典は『集異記』、庶民と共に船乗りとしても召募されている。一方、卷四百七十五・昆虫三・「淳于棼」には、「入朱門……軍吏數百、辟易道側（朱門に入るに……軍吏數百、道側に辟易す）」とあり（出典は唐・李玖『異聞録（纂異記）』、この場合は文官武官の汎称と考えられる。皇甫政の率いた「軍吏」は、「嘉陵江巨木」の「軍吏羣民」に似た四字句という点から見ても、前者の方であろう。

○伎樂 音楽や舞踏。『河東記』では、他に「蕭洞玄」（卷十四・神仙四十四）に一例。

○醜黒 みにくく色が黒い。『太平広記』では、卷二百五十五・嘲諷三・「魏光乘」（出典は唐・張鷟『朝野僉載』）に一例。

○身長八尺 唐代の一尺は、約三十一センチ。これで換算すると異常な背丈になるが、実数ではなく、人目をひくほど背が高いことを言う慣用句であろう。早く『史記』の記述に、卷七・項羽本紀の「籍長八尺餘、力能扛鼎（籍 長八尺余にして、力は能く鼎を扛ぐ）」、卷九十三・韓信伝や卷九十七・

酈其食伝の「長八尺」など、偉丈夫の風貌の描写に見られる。春秋戦国から前漢にかけての一尺は約二十二・五センチで、八尺は百八十センチとなる。この表現が後世に受け継がれたものと考えられる。杜甫にも、「奉寄李十五秘書文巖」二首・其二に「行李千金贈、衣冠八尺身（行李 千金の贈、衣冠八尺の身）」（『全唐詩』卷二百三十一、『杜詩詳注』卷十五）、「別張十三建封」に「揮手灑衰淚、仰看八尺軀（手を揮う 灑衰の淚、仰ぎ看る 八尺の軀）」（『全唐詩』卷二百二十三、『杜詩詳注』卷二十三）の例がある。

『太平広記』では、卷百九十一・驍勇一に、「趙雲」の「身長八尺、姿容雄偉」（出典は闕名『趙雲別伝』）を始めとして、「身長八尺」が幾例か見られるが、特に注目されるのは、異人・異僧あるいは神・鬼などの部に、用例が散在する点である。例えば、卷八十八・異僧二・「佛圖澄」の「身長八尺、風姿甚美」（出典は梁・慧皎『高僧伝』）、卷百八・報応七・金剛經・「張政」の「胡僧長八尺餘」（出典は唐・盧求『報応記（金剛經報応記）』）、卷三百三十・鬼十五・「尼員智」の「一人長八尺餘」（出典は唐・牛肅『紀聞』）など。霊異な能力を持つ者の身体的特徴としても、「八尺」は用いられたようであ

る。

○荷笠莎衣 「荷笠」は、蓮の葉で編んだ笠。「莎衣」は、莎

草（はますげ、かやつりそう）で作った衣。あるいは「莎」

は「蓑」の音通で、「みの」の意。いずれも道人・隠者が身につ

つける。ただ、「荷笠莎衣」という四字熟語は珍しく、他に用

例が見当たらない。

○闇者 門番

○斷 掘る。たたき切る。鋤をふるって掘るように、壁画を

切り崩した。

○鼎沸 鼎の湯が沸騰するような騒ぎの様子をいう。『太平広

記』では、ほかに卷百七十一・精察一・「郭正一」（出典は唐

・張鷟『朝野僉載』）、卷二百四・樂二・「寧王獻」（出典は唐

・鄭棨『開天伝信記』）、卷二百五十九・嗤鄙二・「姜師度」（出

典は『朝野僉載』）に用例が見える。

○驚鬧 驚き騒ぐ。意外に珍しい熟語で、他に用例が見当た

らない。

○武士 兵士。また広く武人を指す。

○顛癩 癩癩。精神が異常になる病氣。

○捨 施し与える。喜捨する。

○生人 生きている人。生身の人間。『河東記』では、「李敏

求」（卷百五十七・定数十二）、「盧佩」（卷三百六・神十六）

に「究極奢麗」の用例が見える。

○撫掌 手を打つ。喜ぶさま。『太平広記』中にもしばしば見

え、卷百二十四・報応二十三・冤報・「劉存」に「撫掌大笑曰」

（出典は南唐・徐鉉『稽神録』）、卷百四十五・徵応十一・人

臣咎徵・「安守範」に「撫掌大笑」（出典は宋・景煥『野人聞

話』）などがある。

○田舎老妻 現代中国語訳を参照すると、中州古籍出版社本

は「この田舎者の老妻」、天津古籍出版社本は「田舎住まいの

老妻」と解し、北京燕山出版社本および河北教育出版社本は、

「私の妻」と訳す。四字句としては、「田舎の老妻」が自然で

あろうが、いなかおやじの意味の「田舎老翁」「田舎翁」など

の語があることからすると、「田舎老の妻」とも取れよう。『太

平広記選』は、「田舎老、農村老漢、自称」と説明し、自身を

卑下した謙辞としている。ただし、「田舎老」という三字句は、

管見の限り他に見当たらない。

○湖南 『太平広記選』は、この湖を鑑湖と推定する。

○里 唐の一里は、約五百六十メートル。

【原文】 4

叟自葦菴間、引一女子。年十五六、薄傳粉黛。服不甚奢、艷態媚人、光華動衆。頃刻之間、到寶林寺、百萬之衆、引頸駭觀。皆言所畫神母、果不及耳。引至塔前、陸氏爲之失色。政曰、爾一賤夫、乃蓄此婦。當進於天子。叟曰、待歸④與田舍親訣別也。政遣卒五十、侍女十人、同詣其家。至江欲渡、叟獨在小遊艇中、衛卒侍女叟妻同一大船。將過江、不覺叟妻於急流之處、忽然飛入遊艇中。人皆惶怖、疾棹趨⑤之、夫⑥妻已出、攜手而行。又追之、二人俱化爲白鶴、冲天而去。

出會昌解頤及河東記

【訓読】 4

叟は葦庵の間より、一女子を引く。年十五六にして、薄く粉黛を傳る。服は甚だしくは奢ならざるも、艷態は人に媚び、光華は衆を動かす。頃刻の間に宝林寺に至り、百万の衆、頸を引きて駭き観る。皆言う「画く所の神母は、果たして及ばざるのみ」と。引きて塔前に至れば、陸氏 之が為に色を失う。政曰く、「爾は一賤夫にして、乃ち此の婦を蓄ふ。当に天子に進むべし」と。叟曰く、「帰りにて田舎の親と訣別するを

待て」と。政は卒五十、侍女十人を遣はして、同に其の家に詣らしむ。江に至りて渡らんと欲するに、叟は独り小遊艇中に在り、衛卒・侍女・叟の妻は一大船を同じうす。將に江を過ぎんとするに、覺えず、叟の妻の急流の処に於いて、忽然として遊艇中に飛び入るを。人皆惶怖し、棹を疾めて之に趨るも、夫妻は已に出で、手を携へて行く。又た之を追ふに、二人は俱に化して白鶴と爲り、天を衝きて去る。『會昌解頤』及び『河東記』に出づ

【訳】 4

叟は葦ぶきの粗末な庵から、一人の女性の手を取ってあらわれた。年のころは十五六、化粧は淡く掃き、さほど豪華な身なりでもないのに、なまめかしい風情は人に媚びるかのよう、輝くばかりの美しさが人々の心を揺り動かした。しばらくして宝林寺に着いたが、群衆は首を伸ばして驚き見とれ、みな「壁画の神女も、なるほどこの女性には及ばない」と言った。引き連れて階段の前にまでやってくると、陸氏も彼女のために色褪せて見えた。政が「お前は一介の賤しい男でありながら、このような美女を妻としているのか。天子様にお薦め申すべきであろう」というと、老人は「一旦帰りまして

田舎の親族に別れを告げるまでお待ち下さい」と答えた。そこで政は、士卒五十人、侍女十人の供をつけて、その家に行かせた。江辺に着いて水を渡る際、老人は独り小舟に乗り、護衛・侍女と老人の妻は大船に同乗した。江を過ぎるうちに、思いもかけぬことに、流れの急な箇所では老人の妻が不意に小舟に飛び移ってしまった。人々はみな驚き怖れ、棹を急かせて趨り寄ったが、夫婦二人はもう船を出て、手を取り合せて立ち去ってゆく。そこでまた後を追ったところ、二人はともに白い鶴に変身して、中天高く飛び去ってしまった。

【校記】 4

④ 「歸」、会校本校記に「孫本作『婦』」とある。

⑤ 「趨」、会校本校記に「孫本作『逐』」、沈本作『趕』」とある。

⑥ 「夫妻」、会校本は「叟夫妻」に作り、校記に「原無此字。現據孫本補」とある。

【注】 4

○ 葦菴 葦ぶきの粗末な家。唐代以前の用例が意外に他に見当たらない。『駢字類篇』巻百八十七・草木門十二は、明・楊慎『秋林伐山』の記事を引いて、唐・戴孚『広異記』に「葦

菴漁父」の語が見えるとする。『大漢和辞典』は、おそらくこれに拠る（第九巻八〇〇頁）。『秋（芸）林伐山』は未確認であるが、同じ楊慎の『升庵集』巻六十七に「葦菴漁父、見廣異記」とある。明・彭大翼『山堂肆考』巻二百三十四・補遺にも同じ指摘が見え、清・沈自南『芸林彙考』巻十・称号篇は、『秋林伐山』の記述を引用する。ただ、現行活字本の古小説叢刊『広異記』（方詩銘輯校、中華書局、一九九二年）の本文および補遺いずれにも、該当箇所が見当たらない。

○ 薄傅粉黛 「傅」は、塗る。「粉黛」は、白粉と眉墨。薄化粧をする。『北齊書』巻四・文宣帝紀に「塗傅粉黛」の語が見える。

○ 艷態 なまめかしい風情、態度。『太平広記』巻百七十二・精察二の「劉崇龜」に「艷態妖容」（出典は後周・王仁裕『玉堂閒話』）、巻四百九十二・雜伝記九の「靈應傳」に「風姿艷態、愈更動人」（出典記載無し。唐・闕名『靈応伝』）の用例が見える。

○ 光華 明るく美しくかがやく。輝くばかりの美しさ。女性の美しさを形容する用例は、『太平広記』では他に見当たらないが、魏・阮籍「詠懷詩」八十二首・其七十四に、「色容豔姿

美、光華燿傾城（色容 艷姿美しく、光華 傾城を燿かす）の句がある（『阮籍集』巻下、『先秦漢疑魏晉南北朝詩』上・魏詩卷十）。

○頃刻 わずかな時間。しばらく。『河東記』では、「崔紹」（卷三百八十五・再生十一）にも用例あり。

○引頸 期待あるいは願望とともに、首を伸ばして望み見る。

「延頸」に同じ。『太平広記』巻四百九十七・雜録五・「王鏐」に、「引頸望之」（出典は唐・闕名『盧氏雜説』）の語が見える。

○爲之失色 「失色」は、古典の中では「驚きや恐れて顔色を変える」の意味で用いられることが多い。ただ、後世になると現代中国語「失色」の「色があせる」「見劣りがする」「面目を失う」の意味でも用いられるようになる。『太平広記』の現代中国語訳も解釈が二つに分かれる。北京燕山本と天津古籍本は、いずれも「顔色を変える」。一方、中州古籍本、河北教育本および『太平広記選』は、「陸氏も彼女と比べると、そのために色褪せて見えた」の意とする。

『太平広記』には、「失色」の語が他に二十数例見えるが、現代語と同じ意味で用いられているものはない。正史に見え

る「爲之失色」の用例を調査してみると、『晋書』巻八十五・劉邁伝、『南齊書』巻五十三・良政・虞愿伝、『旧唐書』巻六十二・李綱伝など唐以前の文献では、こちらもすべて「顔色を変える」の意である。となるとこの意味に取るのが正しいように思われるが、ただ文意としては、「美人で評判の陸氏も彼女のために色褪せて見えた」の方が通りがよい。今、唐代の用例についてさらに調査してみると、康子玉「瓜賦」に、「花葉則煜煜燁燁、文彩則焜焜煌煌、錦繡爲之失色、霞日爲之光（花葉は則ち煜煜燁燁たり、文彩は則ち焜焜煌煌たりて、錦繡も之が為に色を失ひ、霞日も之が為に光を奪はる）」の用例がある（『文苑英華』巻百四十九、『全唐文』巻九百五十三）。人物について用いられた例ではないが、明らかに「色褪せる、面目を失う」の意味である。また唐彦謙「牡丹」には、「開日綺霞應失色、落時青帝合傷神（開日 綺霞は応に色を失ふべく、落時 青帝は合に神を傷ましめん）」（『全唐詩』巻六百七十二）とある。こちらは牡丹を美女に擬えて歌っており、唐代にもこうした用法があったことが分かる。この意味に従って解釈する。

○至江 『太平広記選』は、この「江」を前出の湖（鑑湖）

と取り、おそらく錢塘江を指すものではないとする。ただ、後文の「急流之處」と照らし合わせると、疑問が残る。

○當進於天子 唐代、天子に献上される美女ということでは、天宝年間の花鳥使が有名である。時の皇帝玄宗は、毎年各地に使者を派遣し、美女を捜し求めて後宮に納れた。(記事は『大唐伝載』、『唐語林』巻五、『新唐書』巻二百二などに見える)。この使者を花鳥使と言ひ、元禎の「上陽白髮人」にも、「天寶年中花鳥使、撩花狎鳥含春思。滿懷墨詔求嬪御、走上高樓半酣醉(天宝年中の花鳥使、花を撩み鳥に狎れて春思を含む。滿懷の墨詔 嬪御を求め、高樓に走り上りて半ば酣醉す)」と歌われている(『元氏長慶集』巻二十四、『全唐詩』巻四百十九)。また皇族、大臣や節度使などが、民間の美女を捜して献上することも多く、高世瑜『唐代婦女』(三秦出版社、一九八八年)によれば、唐朝後半期には、節度使の大半が入朝の際にも女口(奴婢とされた女性)を献上しようとした。こうした女口は、娼妓、俳優、家妓、姬妾などであり、民家の娘も若干含まれていたという(一五頁)。皇甫政の発言の背景には、このような当時の風習を考えるべきであろう。

なお高氏の著書には、小林一美・任明訳『大唐帝国の女性

たち』(岩波書店、一九九九年)の邦訳がある。

○田舎親 仮に「田舎の親族」と訳したが、先の「田舎老」と同様に、謙辞の意味を含まう。ただ、この言葉も他に用例が見つからない。

○遊艇 速力の出る小舟。普通、遊覧用の小舟と説明される。この語も唐代以前の用例が少ない。唐・杜佑『通典』巻百三十・兵・水平及水戦且附では、軍事用の快速艇として構造等が説明されている。

○不覺 思わず知らず。思いもかけず。ここは後者の意。常見の語で『河東記』にも散見されるが、多くは前者の意味で用いられている。「盧從事」(巻四百三十六・畜獸三・馬)の「…遂被驅出畜生道、不覺在江陵群馬中(…遂に驅られて畜生道に出で、覺えず江陵の群馬の中に在り)」が、後者の意味であろう。

○惶怖 恐れおののく。『太平広記』には、巻十五・神仙十五の「阮基」(出典は前蜀・杜光庭『神仙感遇伝』)をはじめとして十数例。

○疾棹 棹を速める、船の速度をはやめる。『太平広記』巻百七十二・精察二の「孟簡」に、「疾棹至州」の用例が見える(出

典は唐・盧肇『逸史』。

○攜手 手をとりあう。親密なさま。もとは『詩経』の邶風「北風」に見える言葉。『河東記』では、「蕭洞玄」（巻四十四・神仙四十四）にも「携手上昇（手を携へて上昇せん）」とある。

○化爲白鶴、冲天而去 「冲天」は、まっすぐに天高くのぼる。仙人が白鶴あるいは白鶴に変身する話は、晋の葛洪『神仙伝』巻五の茅君をはじめとして、しばしば見られる。『太平広記』巻四十五・神仙四十五・「王卿」には、「道士二人變成白鶴、冲天而去（道士二人 変じて白鶴と成り、天を沖き去る）」とある（出典は唐・皇甫氏『原化記』。また『河東記』の「慈恩塔院女仙」（巻六十九・女仙十四）は、慈恩寺を訪れた美女と伴の青衣たちの昇天を、「悉變成白鶴、冲天而去」と描写する。

○會昌解頤 『新唐書』巻十九・芸文志の小説家類に「會昌解頤四巻」とあるが、著者名を記さない。佚書で『會昌解頤録』ともいい、『太平広記』には十二話を収める。李劍国『唐五代志怪傳奇叙録』に詳しい考証がある（下冊六四七〜六四九頁）。

【参考】

○九子魔母

明の彭大翼『山堂肆考』巻百四十二・誕育に「祈魔母室」と題する一條があり、皇甫政が妻と魔母に祈つて男児を得るこの話の冒頭を、『太平広記』に基づいて略記している。また、馮夢龍『情史』巻十九・情疑類の「九子魔母」は、古廟の魔母の塑像が娘に姿を変えて現れ、呉生という男と情を通じる話であるが、按語に「黒叟」を略引する。

范崇高『中古小説校釈集稿』（巴蜀書社、二〇〇六年）の「九子母」に関する考証（三三七〜八頁）は、次のような内容である。

『太平広記』巻百六十・定数十五・婚姻・「李行脩」に、「靈應九子母祠」の名が見え（出典は唐・温奮『統定命録』）、范氏はこれを仏教の鬼子母神とは異なる神と見なす。その論拠は、『漢書』巻十・成帝紀「元帝在太子宮生甲觀堂」の唐・顏師古の注に引かれる後漢・応劭の注解、「甲觀在太子宮甲地、主用乳生成也。畫堂畫九子母（甲觀は太子宮の甲地に在り、乳を用て生成するをつかさど主るなり。画堂に九子母をえがく）」であ

る。これによれば前漢の元帝の時、九子母神の画堂が既に存在したことになる、後漢の明帝の時とされる仏教伝来に先立つからである。范氏はさらに、『楚辞』の「天問」が「女岐無合、夫焉取九子（女岐は合すること無くして、夫れ焉^{いづ}くんぞ九子を取る）」と歌う多産の女神を挙げ、これが九子母神の原型ではないかと推測する。興味深い論考ではあるが、この「畫堂」に描かれた絵画については、すでに顔師古が「畫堂、但畫飾耳。豈必九子母乎（画堂は、但だ画飾のみ。豈に必ずしも九子母ならんや）」と疑問視しており、以後も宋・朱翌『猗覺寮雜記』（巻下）、明・周嬰『卮林』（巻三）など、応劭説を疑う説が続く。この点については、さらに慎重な検討が必要と思われる。ただ、九子母神の原型は、「女岐」のような古代神話にまで遡り得る可能性を持つ。

続いて范氏は、仏教寺院中にも「九子母神」あるいは「九子魔母」と称するものがあるとし、『荆楚歲時記』およびこの「黒叟」を引く。『荆楚歲時記』は、梁の宗懐の撰。現行のテキストには見えない一節で、唐の韓鄂『歲華紀麗』巻二の引用に「四月八日、長沙寺閣下、有九子母神。是日、市肆之人無子者、供養薄餅以乞子。往往有驗（四月八日、長沙寺の閣

下に、九子母神有り。是の日、市肆の人の子無き者は、薄餅を供養して以て子を乞ふ。往々にして驗あり）」とある。これをもとに氏は、子授けの鬼子母神が「九子母」「九子魔母」と称されるようになったのは、中国固有の九子母神の影響を受けた結果で、ここに仏教・道教の融合現象が見られるという。傾聴すべき見解であろう。

他に、『太平広記選（修訂本）』の「李行脩」の注4は、「靈有應九子母」について、「佛教有九子魔母之説、但不応加靈応二字、似非一神」と記す（下冊一一〇〇頁）。また同書は、『會昌解頤録』所収話として「黒叟」を採録し、「魔母神堂」について「這里的魔母非指后世所說的九子魔母、応是指后世所謂送子觀音」と説明している（上冊四七五頁）。ただ、「後世に謂うところの九子魔母」がどのようなものか、詳らかでない。また欒保群編著『中国神怪大辞典』（人民出版社、二〇〇九年）に「九子母」の項目があり、「女岐」を星神として「九子母」の淵源と見る、游国恩、聞一多の説を紹介している。同書は、ほかに南宋・陸游『老学庵筆記』巻十にも、関連記事が見えることを指摘する。

なお、范・王・欒氏のいずれの考証にも言及が無いが、「九

子母」については、唐・李吉甫『元和郡県志』卷三十八・嶺南道・交州・龍編県に、「九子母祠、在縣東十四里」の記事が見える。この祠について宋・樂史『太平寰宇記』は、卷百七十・嶺南道十四・交州・龍編県の「石九子母祠」の項で、「交州志云、石九子母者、坐高七尺、在今州寺中。九子悉附於石體。傳云、浮海而至。士庶禱祀、求子多驗、於今不絶（『交州志』に云ふ、「石九子母なる者は、坐高七尺にして、今州寺中に在り。九子は悉く石体に附す」と。伝に云ふ、「海に浮かびて至る」と。士庶禱いり祀まうり、子を求むれば驗多く、今に於けるも絶へず。）」と述べている。海から渡来したという伝承を信じるならば、中国固有の神ではなく、もとは南方異域の神ということになる。また『太平寰宇記』卷三・河南道三・河南府一・洛陽県の「開陽門」の条には、「上有九子母象、國家常往祈焉（上に九子母の像り、國家常に往こきて焉これに祈る）」とあり、九子母信仰の隆盛と広がりが見られる。単なる子授けの神というに止まらず、國家規模の信仰の対象ともなったようである。

○李謨

注1の「皇甫政」の項で紹介した、笛の名手李謨にまつわ

る話（『樂府雜録』所載）には、唐の李肇『唐国史補』卷下に類話があり（『太平広記』卷二百四・樂二・笛にも収められる）、ここでは彼に笛を命じるのは皇甫政ではなく李舟、笛を吹き裂いた人物の正体は蛟龍であろうとされる。また、『太平広記』が卷二百四に『国史補』と並載する唐の盧肇『逸史』の話は、李謨が孤独丈と呼ばれる茅屋住まいの老人から笛を教わるというもの。老人の吹く笛が曲の途中で裂け、その後老人は姿を消すなど、共通する筋立てが見られる。同じ話が唐の楊巨源『李謨吹笛記』にも見えるが、李劍国『唐五代志怪傳奇叙録』によれば（下冊一二〇二頁）、これは偽書とされる。

唐代、天下第一の名手と称された李謨は、あるいは李謦、李牟とも記され、このように幾つもの笛にまつわる逸話が伝わる。宮中の新曲を聴いて盗み写したという話もあつて、これは元禎の「連唱宮詞」（『元氏長慶集』卷二十四、『全唐詩』卷四百十九）に、「李謦壓笛傍宮牆、偷得新翻數般曲（李謨笛を擲おへて宮牆せに傍そばひ、偷み得たり 新翻の數般の曲）」と歌われている。（岡田充博）